

万博をきっかけとしたESDの検討状況について

2024年2月19日 第3回資源循環ワーキンググループ

公益社団法人 2025年日本国際博覧会協会
企画局 持続可能性部 資源循環課



第2回万博を活用したESD意見交換会

- 1月16日に開催、ESD有識者を始めとした37名にて意見交換を行った。(オンライン)
- 脱炭素、資源循環、全般、ツアー・Webの4分科会に分かれ、意見出しや議論を行った。
- 事務局からの議題と分科会、まとめでの意見は次項以降の通り。
- 今後のスケジュールは以下を想定。

□2024年4月～12月

3～4回程度細かく分けた分科会でWSを行い。内容を詰めていく(分科会は例えば以下)

- ・資源循環体験型プログラム、・脱炭素体験型プログラム、
- ・その他要望の強いもの(防災、食、国際理解特化、人権等)の体験型プログラム
- ・会場内ツアー、・Web作成

□2025年1月～3月 ファシリテーター養成等必要な準備



体験型プログラム（案） ～ 今後の検討事項

- 発信したいメッセージ、コンセプト:例えば、①メッセージとしては:大変だけど希望をもって取り組み続けるきっかけとする。②今ならまだ間に合う。2つの選択肢の岐路に立っていることの認識を持ってもらう。もしかしたら統一的なものではなくて、プログラムごとでもいいのかもしれないが。
- 何を持ち帰ってもらうか?行動につなげるところまで考えるか。
- 万博の会場でやる意義は何か。せつかくなので他のパビリオンとの連携等万博にあるリソースを活用したいと考えるが、どう使えるか。他校、他地域、他国との連携をどう絡めるか。
- 事前教育、事後教育との一連の流れの中でどう組み立てるか。事前、事後に必要なもの。
- その他:五感をいかしたもの?音楽、ダンス?
- どんな分野のプログラムを用意するか。資源循環、脱炭素以外には?
- どのような運営方法が考えられるか?お金をかけて専従者を用意するわけにはいかないなので、ボランティアの協力を得て工夫して運営する必要。



体験型プログラム ～ 議論の出発点として

- プログラムの人数単位: クラスで同じことを学んでいる場合はクラスでのプログラム。と②探究の時間等でグループで課題を選ばせている場合も多い。これに対応したプログラム(グループを複数受け入れるプログラム?)。両方あるか?
- 時間: 近隣の児童生徒は、最大でも9時～14時、15時ぐらいが滞在時間。このうちの1時間を使い、話を聞けるのは最大10分程度?あとは意見交換等?
- 参画のさせ方: ①当日の議論に参加してもらう、②当日までにウェブ上に課題についての自分の、または自分の地域の関係する写真(例:岸に打ち上げられたゴミ)等をWeb上に持ち寄ってもらう。等
- SDGsロゴ: 他の問題とのつながりを意識することは狙いの一つとしてあってもよいし、全体のつながりを見せるプログラムがあってもよい。この時にSDGsロゴは効果的に使えるのではないか。
- 開催側の手間との関係: 週1回プログラムをやるぐらいなら多少手間のかかるプログラムは考えられる。平日毎日のようなプログラムはよほど手間のかからないプログラムを作らない限り不可能。

*参考データ: 大阪府の小学校は約1000校、中学校は約500校、高校は約250校。会期はおよそ26週。夏休み6週と土日を除くと約100日。仮に大阪府の数と同等の数の学校が他の都道府県が来るとすると、毎日小学校20校、中学校10校、高校5校が来ることとなる。 →やり方次第では違う学校間での交流というのも可能か。

→これだけの人数全部を対象とするのはWebということになる。会場内ツアーやプログラムは特別に興味を持ったクラス、グループを対象にすることとなるのではないか。



体験型プログラム ～ 万博で行うメリット（可能性）

①外国の方との交流の機会？

外国の環境意識、環境対策、環境の現状との比較から考え、実践に移す？

外国語でやる？自動翻訳機という可能性もある。

②他校との交流

③最先端の技術に触れてその技術の提供者との対話？

－SAFについて学び実践したり、地域の対応を学ぶことにつなげる。

－回収した二酸化炭素を実感してもらう。

－食品リサイクルについて実感してもらう

④万博の変遷(1970年、2005年、2025年、場合によっては戦前に企画された1940年)にあわせた

環境の状況、対策についての議論



第2回万博を活用したESD意見交換会の主な意見

分科会	意見
脱炭素	<ul style="list-style-type: none"> ✓世界的に見ても日本の脱炭素への取り組みは急務であり、それを訴求するものにしたい。既に一部教育プログラムがあり、子供たちの感度も高い。 ✓探究学習にできていない現場が多い。子供たちに興味をもって取り組んでもらう導入が重要。各国パビリオンからの学びや気付き、“交流”がきっかけになる。 ✓発表などアウトプットの場としていきたいが、学校としては半年前には具体の検討を開始できる材料(場所、教材等条件)が欲しい。
資源循環	<ul style="list-style-type: none"> ✓学びの連続性が大切。事前学習をしっかりと行ったうえで当日しっかりと学び、そこで学んだことをどのように自分事化し、未来に生かしていくか。 ✓過去万博の事例から課題を見出したり、学校外などとの“交流”によって学びが深まる。 ✓リアルではバックヤードツアーがあると良い。遠隔地の学生のためにバーチャル会場などWebも活用してもらいたい。
全般	<ul style="list-style-type: none"> ✓万博であるので、他国の学生や大人との“交流”は必ず行いたい。Web、アプリ、メタバースなどバーチャルを活用して、国際子ども会議のようなものがないか。そんなに大仰なものでもなくても、すでに学校、NPOでやっているようなプログラムをベースにすればよい。 ✓子供たちには、ごみアートなどワクワクするもので興味を持ってもらい、対話する仕組みを作っていく。 ✓しっかりした参画が必要なものはのってこない児童生徒も多い可能性があるが、食を、伝統食と自然との繋がりなどは子供たちに興味を持ってもらいやすい。海外との繋がりもイメージしやすく、そうしたふわっとした感じのアプローチもあるのではないか。

第2回万博を活用したESD意見交換会の主な意見

分科会	意見
ツアー、Web	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 教材は多くの国の学生に使ってもらえるのが理想。過去博のインタビュー等で魅力を発信。子供たちに未来をデザインする機会を。 ✓ 高校生はWeb上で製作、発信する力が非常に強くそれが主な情報源でもある。いいねをもらう以外に、大人からの承認欲求がある。環境関連の発信をする文化がこれを機にできれば。 ✓ SNS等のツールを活用して事前に興味をもってもらい、多くに参画してもらおうと共に会場での“交流”を経て、行動宣言などのアウトプットの場とする。
まとめ	<ul style="list-style-type: none"> ✓ 脱炭素と資源循環の中でも気候変動がメインとなる。次に海ごみ、食(or水)、防災(減災)のために、脱炭素がつながっていく形ができれば。気候変動と災害は表裏一体であり、影の部分を科学技術等で解決して光(コンセプト、可能性、夢)を一体で見せていく。万博なので明るい未来を示していくことが重要ではあるが、影の部分もしっかり伝えていくものとするべき。 ✓ “参画”して同じ土俵で意見を言い合う“交流”を実現する。アウトプットの場とすること。 ✓ インセンティブがあるとよい。コンテスト、表彰というアプローチもあるが、修了証、認定証のようなものという考え方もある。 ✓ 体験プログラムはハンズオンとバーチャルを両立すべき。 ✓ 指導要領との関係もあるが、プロジェクト型、探究学習型などへも間口を広げ、参加できる学校、学生の裾野を広げていく。

